

2025年度

S F

小論文

3月12日(水)

グローバル共創科学部

12 : 20 ~ 13 : 40

【後期日程】

注意事項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(3枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、4ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(3枚)を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・書き出しは、一マスあけない。
- ・改行したら一マスあける。
- ・句読点及び括弧等は、それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」等はそれぞれ一マスで使う。
- ・行の最後の句読点は、最後のマス目の文字と一緒に書き入れる。

- 6 問題は、声を出して読むではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

次の文章は、中村桂子『人類はどこで間違えたのか』より、「農耕社会への移行——手なずけることの意味について」と題する一節からの抜粋である。これを読み、後の問一から問三に答えなさい。

狩猟採集から農耕への移行では、牧畜が行われ、動物との関係が変わりました。「家畜化」です。農耕でも牛や馬を利用しますし、ニワトリを飼うなど家畜化は行われます。ここで出てくる言葉は「手なずける」または「飼いならす」です。

動物の場合、植物と違って人間からのほたらきかけだけでなく、動物の側から人間に向けてのはたらきかけもあるのが興味深い点で、オオカミから家族の一員になったイヌがその例です。

聴覚も嗅覚も人間より優れているオオカミは役に立ちます。狩猟採集生活者もだんだん定住を始め、その頃から従順なオオカミと人間の関係はさらに深くなり、農耕が始まる頃には「ヴィレッジドッグ」^(注一)と呼ばれる存在となったとされます。ヴィレッジドッグはペットでもなければ、狩りに役立つわけでもない存在でしたが、オオカミのような群れをつくることはなく、人間の生活圏の周囲にいて、個体数を増やしていききました。柴犬と秋田犬は古代種と呼ばれ、狩猟犬として人間と長い間つき合ってきた仲間です。他方、テリア、スパニエル、チワワなど、今私たちがイヌと呼ぶ仲間は19世紀になってつくり出されたもので、人間の作品ですが、イヌがオオカミの子孫であることはゲノム解析が明らかにしています。

このようにして始まった動物との関わりは広がり、家畜(食べものにもなる)やペットは私たちの暮らしに不可欠な存在になりました。ウシ、ブタ、ウマ、ヒツジ、ヤギなどの他、限られた地域で活躍するトナカイやラクダ、ペットとして生活に深く入り込んでいるネコなど、それぞれの生きものと人間との関わりの生まれ方は、一つひとつ興味深いものがあります。そのなかでの「手なずける」という関係に注目します。

1960年頃に行われたイヌ科のギンギツネの家畜化実験では、半世紀で完全にしぐさや目の動きで人間の意図を読み取り、人間の意図に従うようになったギツネたちは、興味深いことに垂れ耳や巻き尾、短い鼻面というように、まさにイヌっぽくなり、毛の色も銀色に茶の斑点が混ざったり、顔にも白斑が出たりするなど、家畜によく見られる様子に変わりました。この間に大きな変異が起きたとは考えにくく、本来持っていた性質が選択されたのでしよう。

オオカミは社会性が高く、家畜化しやすいわけですが、ギツネのように単独性をもつ種でも、人間が選択をしていけば同じ性質にできるのですから、動物はさまざまな性質を持っていると言えます。これは人間についても言えることでしょう(ダガトキン、トルート『ギツネを飼いならす——知られざる生物学者と驚くべき家畜化実験の物語』青土社)。

狩猟採集から農耕への移行では、植物も「手なすける」対象です。野生のコムギもオムギも小粒で、自然に落ちる、つまり脱粒する性質を持っていますから、そのままでは主食の材料にはなりません。脱粒しない大粒の種子をつける株が選ばれてきたのですが、ここには動物の場合のような相互作用は感じられません。ただ動物の家畜化の過程で、自分たちに都合のよい性質を選んでいきながら「手なすけ感」を味わった人々は、植物に対してもその感覚を持つようになったでしょう。よしよし思い通りになったぞという満足感です。

本格的な農耕社会になれば、生活の基本は動植物の生命操作の上に成り立ちます。ところで興味深いことに、手なすけた結果、種まきや水やりなどの作業や家畜の管理に長い時間を費やすことになったのです。それでは自由時間が減っていくではありませんかと問いたくなりますが、思い通りにしようという気持ちの方が強かったのでしょう。種まきをして作物がよく育つように土地を拓いたり、水路をつくるなどもしましたから、手なすける対象は自然全体に広がり、⁽¹⁾「自然を手なすける」という感覚が、人間の中に生まれます。

さらに、はたらけばより多くの食べものが手に入るという思いが生まれたことも重要です。こうして、農耕生活に入った私たちの祖先は、「自然を手なすける」という感覚を持ち、「必要なだけ手に入れるのではなく生産量の増加を求める」ことを始めました。食糧の増加が皆のよりよい生活につながったかと言えば、そうはならなかったことを歴史は示しています。人口爆発が起きて、それを支えるためにはたかなければならなくなった上に、階級が生まれて、特別な人たちが食事を楽しむ社会になっていったのです。

自然を手なすけるという感覚は、「人を手なすける」ことにもつながります。集団を構成する人数が多くなると、人間同士の関係がフラットでなくなり、人間に対しても支配や操作の感覚が生まれるのです。

「手なすける」つまり「飼いならす」という行為は人間の暮らしを支え、現代文明にまで続く発展へとつながりました。この流れは人間も飼いならしていきます。アリス・ロバーツの『飼いならす——世界を変えた10種の動植物』(明石書店)では、10種の典型例として、イヌ、コムギ、ウシ、トウモロコシ、ジャガイモ、ニワトリ、イネ、ウマ、リンゴ、ヒトが語られます。ここで注目するのは最後にヒトが置かれていることです。リチャード・C・フランシスの『家畜化という進化——人間はいかに動物を変えたか』(白揚社)でも同じように「自己家畜化」という言葉が出ています。

家畜化すると、イノシシからブタの場合に見られるように咀嚼器官が退化して、長く出ている鼻先が短くなりますが、人間でもまさにそれが起きています。皮膚や毛について色素の減少や貧毛、縮毛などが見られるところも共通しています。性差も小さくなります。人間は自分たちを家畜と同じようにしようとしているわけではありませんが、自然環境から離れて文化をつくり出していく過程が、家畜での「飼いならす」と同じことを求めたのでしょう。生活を管理の方向に向けていることは確かです。

なかでも興味深いのは、家畜の従順さです。人間は社会的動物であり、しかも協力行動を特色とします。協力についてヒトとチンパンジーの比較によって人間の協力的傾向を示す実験を行った米国のマイケル・トマセロによると、協力が行われるためには、①参加者が共同の目標を持ち、目標に対する責任感を共有する、②参加者が目標達成のために相補的な役割を流動的に果たそうとする、③参加者は互いに助け合う、という三つが必要であるが、これがチンパンジーには原則見られず、人間では小さな子どもにもあることが示されました。印象的なのは、まだ言葉がはつきり話せない子どもでも、指さしをして相手の注意をそちらに向けさせるのです。相手に情報を与え、共有しようとするわけです。

②人間の家畜化がこのような形で進み、野生動物に見られる攻撃性が少なく協力的行動をとるという方向が現れていることは、現代社会に生きる者としてむしろ積極的に評価し、それを生かしたいものです。

ただ^③現在使われる「自己家畜化」という言葉には、ここに止まらない問題意識のあることに気づかなければなりません。人間の場合、自身を自然環境から離し、操作しやすい人工環境の中で暮らすことを進歩として高く評価する文明をつくったために、家畜化がその文明に合わせる形で進んでいるのです。コントロールされた閉鎖空間を求めてビルを建てることになり、大型都市の建設、大量エネルギー消費の下での文明が、自然を破壊するだけでなく、人間が生きものであることを忘れさせています。

お互いに協力する暮らしをつくるのが拡大・進歩・効率という価値観を持つ社会につながったために起きた問題であり、この価値観は見直す必要があります。

狩猟採集から農耕への移行は、定住生活、つまり他の野生動物とは異なる人間(ホモ・サピエンス)独自の生活の始まりであり、従来、野蛮から文明へのすばらしい転換として評価されてきました。けれども支配・操作・拡大・階級などという現代社会の持つ問題点とせざるを得ないことがすべてここで始まっているのです。

だからと言って、農耕への移行を止めるといふ選択はありません。自ら考えてよりよいものを求め新しい生き方を探ることをせずにはいられないのが人間であり、その一段階としての農耕には大きな意味があります。けれどもそこで、時に自然の大きさを受け入れ、時に一つひとつの生きものへの愛おしさを感じるのが大事です。そこから自然の一部である自身を大事にしながらか、しかも謙虚さを失わない生き方を基本的に置く仕組みを持つ社会をつくること、支配・操作ではなく、自然の持つ力に手を添えるという関わり方をするを願います。

(注一) ヴィレッジドッグ・・・人間の集落やその周辺で半ば野生の状態で生きるイエイヌのこと。専門家の解析によると、ペットのイヌが野良犬化したのではなく、何千年もの間、ただ人間の近くで生き延びてきたものであり、イヌ科動物が家畜化され始めた当初の状態のゲノムを有していると考えられる。

(注二) 咀嚼(そしゃく)器官・・・咀嚼とは食べ物を口でかみ、粉碎することを指す。歯、歯を支えている歯肉などの組織、顎(あご)を動かすときに使う神経・筋肉、顎関節などを咀嚼器官という。

【中村桂子『人類はどこで間違えたのか——土とヒトの生命誌』(中公新書ラクレ、二〇二四年、二六七頁―二七七頁)。

なお、出題の都合上、原文の一部を省略・変更している。】

問一 傍線部①「自然を手なずけるという感覚」が人間に生まれたのはなぜか。文中の言葉を用いて二二〇字以内で説明しなさい。(配点二〇%)

問二 傍線部②「人間の家畜化」のメリット、デメリットは何か。筆者の考えを三〇〇字以内で書きなさい。(配点三〇%)

問三 傍線部③に関して、現代社会における「自己家畜化」という言葉で表される問題について、筆者は例として大型都市の建設、大量エネルギーの消費を挙げているが、その他であなたが考える具体例を挙げ、それにどう対応していけばよいかを、五〇〇字以内で論じなさい。(配点五〇%)